

殻にこもらず「かに外交」

新年あけましておめでとうございます。当地に赴任をして約半年が過ぎましたが、公私にわたり色々な場所を訪れ、様々な方と触れ合う中で、改めて北陸の良さを体感しており、日に日に「北陸愛」が深まっています。

北陸の良さを語り始めたらしきありませんが、美味しい食べ物もその魅力の一つです。中でもこの時期は「かに」を外すわけにはいきません。私も何回か「かに」を食す機会がありましたが、本当に美味しく、胃袋だけでなく、心までも満たされました。

昨年末には、東京勤務時代の部下・同僚が毎週のように訪ねてきました。当初は、自分の人望が厚いからだと思い込んでいましたが、年末に集中していたのはやはり、「かに」目当てであったに違いありません。フランスは、ワインを外交手段として巧みに使うことから、これを「ワイン外交」と呼んだりしますが、北陸でもきっと「かに外交」がいろいろなレベルで展開されているのではないのでしょうか。

さて、今回は年始でもありますので、少し大きく、現在の世界情勢について申し上げたいと思います。

2017年を振り返ると、経済面では総じて順調な1年でありました。一方、政治的には、米国でトランプ大統領が就任して以降、環太平洋経済連携協定（TPP）離脱といった自国優先の姿勢が示されたほか、欧州でも欧州統合に反対する動きが一部で広がるなど、世界のリーダーである先進国で内向き志向の強まりが目立ちました。

これらの背景には、貧富の差の拡大を背景とする国民不満の高まり、そしてこれを背景とするグローバリゼーションへの批判、ナショナリズムの台頭があると思います。少し前にベストセラーとなった「21世紀の資本」で著者のトマ・ピケティは国際的な貧富の差の拡大に焦点を当てましたが、彼は、貧富の差の拡大がグローバリゼーションによってもたらされたものではなく、むしろ国内的な要因によってもたらされたとしています。もしそうであれば、貧富の差の拡大をグローバリゼーションのせいにするのは的外れということになります。

そもそも、わが国をはじめとする多くの国は、世界貿易の拡大を背景に成長してきました。一方、自国優先の近隣窮乏化政策は世界大戦を招きました。世界的なナショナリズムの台頭が世界経済の成長を鈍化させ、これがさらなるナショナリズムの台頭を生むという悪循環に陥ることは絶対に避けなければならないと思います。

「ワイン外交」にせよ、「かに外交」にせよ、外交の基本はお互いを理解することです。各国が融和と調和の精神で外交に臨み、しっかりとスクラムを組んで世界に平和と安定をもたらすことを切に願う次第です。